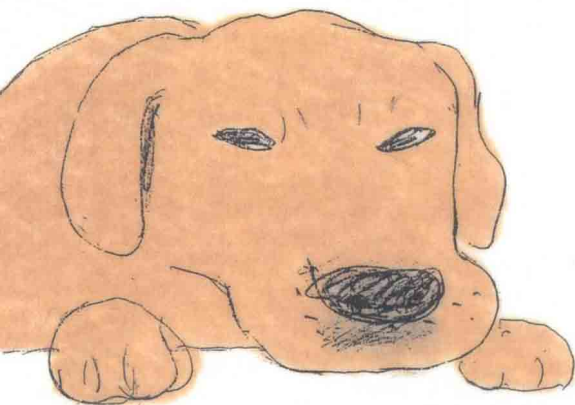
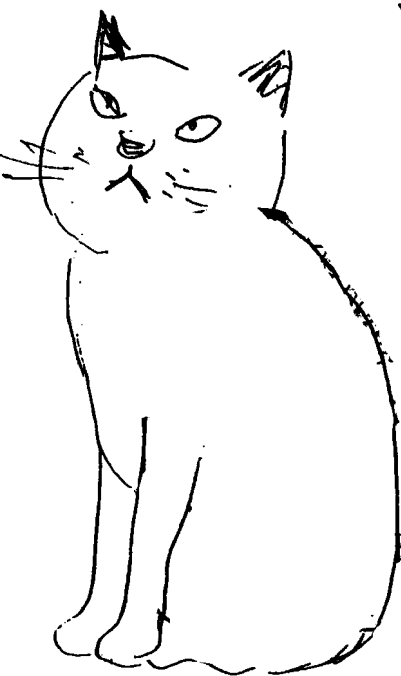


永沢光雄
すべて世は
事もなし



永沢光雄　すべて世は事もなし



筑摩書房

永沢光雄（ながさわ・みつお）
昭和三四（一九五九）年、宮城県
に生まれる。大阪芸術大学中退。
出版社での雑誌編集を経て、一
九八八年以降、風俗、スポーツ
分野で秀れたノンフィクション
作品を発表。著書に『AV女
優』『風俗の人たち』『強くて淋
しい男たち』等がある。

すべて世は事もなし

二〇〇一年十月二十五日 第一刷発行

著者 永沢光雄

発行者 菊池明郎

印刷 刷暁印刷

製本 牧製本

発行所 筑摩書房

東京都台東区蔵前二一五―三

〒一一八七五五 振替〇〇一六〇八四二三

すべて世は事もなし ※ 目次

息子をつれて

7

ろくでもない物しか入っていない冷蔵庫

21

親友

36

縛られた男

51

自立

65

道子と盛夫

78

虹色の魚

92

「メリー・クリスマス！」

110

二人ぼっち

123

村の小説家

137

嗚呼、栄冠は君に輝く！

150

ゴールデン・ウィーク——祝祭

164

海辺の町に家がある

178

恋はどしゃぶり

192

まゆ、と、まや

205

大阪近鉄バファローズ！

219

すべて世は事もなし

234

装丁・装画・扉絵
南 伸坊

すべて世は事もなし

息子をつれて

子供を預かれ、と四年前まで妻だった女が電話で言ってきました。

「わたし、恋をしちゃったの。それで彼氏と二週間、バリ島に行くことになってさ、その間、和也を預って欲しいんだ」

「一緒につれて行けばいいじゃないか」と僕が言いました。

「わたしにだって恋のバカンスを楽しむ権利はあるわ。間違ってる？」

「じゃ、君の実家に頼めば？」

「何よ！」と女が怒りました。「自分の息子を預かるのがそんなに嫌なの？ 別れてから今まで一度も和也に会ったことがないんだから、たまには二人で暮らしなさいよ！」

会わせてくれなかったのは君だろ、という言葉は僕は呑み込みました。そんなことで言い争

つても疲労は無駄に終わるだけです。

「和也には海外出張だって言っているからよろしくね」、女は旅行会社に勤めています。

三日後、女が息子をつれてアパートにやって来ました。そして子供の着替えの入った紙袋を置くと、心ここにあらずといった嬉々とした顔をして一人出て行きました。

四年ぶりに会った小学校に上がったばかりのはずの我が息子は、半ズボンを穿きリュックサックを背負っていました。

「よろしく願います」と慇懃に頭を下げる息子に、「暑かったろう。何か飲むか？」と僕は冷蔵庫の中を見せました。僕の冷蔵庫の中にはいろいろなソフトドリンクが入っています。それらを使つての焼酎のカクテル作りが唯一の趣味なのです。息子はリングジュースを選びました。

「まあ、これからよろしく」、クーラーの利いた六畳間の畳の上に座った僕は、焼酎のカルピス割りでリングジュースと乾杯しました。テレビでは夏の甲子園大会が放映されています。息子が生まれた時、絶対に野球をやらせようと思ったことを思い出しました。

「映りが悪いね」、テレビの画面を見て息子が言いました。

「ああ。ここ、NHKの入りがどうも悪いんだ。夜になれば少し良くなるけど」

「大丈夫かなあ」、そう言う息子はリュックの中から箱状の物を取り出しました。それがテレビゲームという物であることは僕にもわかり、慌てて言いました。

「御免。うちにはそれを遊べる機械がないんだ」

「えっ！」 息子は啞然とした顔をして僕を見つめました。小学一年生にそんな顔をさせてしまい、僕は罪悪感を覚えました。啞然から失望に顔の色を変えた小学一年生はゲームをリュックに仕舞いながら、「インターネットの時代だっていうのに」と呟きました。

「ママはインターネットをやってるの？」と僕は訊きました。

「うん。ママの仕事には欠かせないからね。家に帰っても、毎晩遅くまでインターネットで仕事をしてるよ」

仕事だかどうだかわかったもんじゃない、と僕は思いました。しかし、テレビゲームかあ……僕は二カ月前に息子の誕生日に送ったプレゼントのことを考えました。会うことが母親に禁じられていたので、せめてもと毎年の誕生日には何がしかの物を彼に送っていたのです。今年は恐竜が飛び出す絵本でした。相手がテレビゲームでは、喜んでくれなかったろうな……。母親の手で捨てられたかもしれません。

インスタント焼きそばを作り、僕と息子は向かい合って遅い昼食をとりました。

「ママが二週間も出張で淋しくないのか？」と僕は息子に訊きました。

「別に」と息子が答えました。「だって、ママは仕事でいつも遅いから、いてもいなくても同じだよ」

「夕御飯はどうしてるんだ？」

「ママが作ってくれてるのをチンして食べる」

「スポーツは何かやってるのか？」

「水泳。スイミングスクールに行ってるんだ」

「野球は？」

「興味ない。学校でも誰も野球なんかやらないよ」

「そうか」、僕は高校生たちのぼんやりと映っている野球の試合に目をやりました。

息子が産まれた時、僕はバーで飲んでいました。たまたまではありません。意図してそうだったのです。今から思うと幼くも馬鹿な美意識なのですが、物書きの端くれたる者、子供が産まれた時は絶対に飲み屋にいるべきだと思っていたのです。病院の廊下で苛々しながら出産を待つなんて格好悪い。

出産予定日の二日前から僕は友人の経営するバーに入り浸ることにしました。妊婦は自分の実家に帰っていました。

朝まで飲み、昼はバーのソファで眠り、夕に起きてはまた飲み始める。ひとえに後々、友人たちに「ガギが産まれた時に俺、飲み屋にいてペロンペロンでさあ」と自慢したい一心。大した文章も書いていなくせに。

ところが予定日を過ぎて、なかなか産まれたという連絡がありません。こうなると意地で

す。僕はバーに居続けました。そして一週間目の明け方、僕は意識を失いカウンターの椅子から転げ落ちました。急性アルコール中毒です。友人が救急車を呼びました。その時です。僕の胸ポケットの携帯電話が鳴ったのは。友人が出ました。義母からでした。「今、産めました」友人が頼み込み、僕を乗せた救急車は妻のいる病院へ向かいました。尿を漏らしたまま、僕は産婦人科に入院させられました。

その日からです。妻はもちろん、義母と義父の僕を見る目がすっかり変わったのは。

人間失格者。人生の落伍者。

夫婦仲は見事なまでに冷えに冷えきり、半年後に僕たちは別居。離婚が正式に決まったのは、その一年半後のことでした。

昼食を終え、僕は息子をつれて電車に乗りました。新宿で仕事の打ち合わせがあるのです。そんな場に子供を同行させるのはいかかなものかとは思いましたが、今日来たばかりというのに自宅と同じように夕方を一人で過ごさせるのはしのびなかったのです。

「用事が済んだら、デパートでテレビゲームができる機械を買おうな」、それは幾らぐらいするものだろうとやや心配しつつ、電車に揺られながら僕は息子に言いました。

「本当?」、目を輝かせて息子は笑いました。その顔を見、僕は自分が父親になったような気がしました。父親なのですが。

紀伊國屋書店の横にある喫茶店に入ると、ルポルノ出版の大木君は先に来ていてコーヒーを前に煙草を吹かしていました。大木君は僕の担当編集者です。

ルポルノ出版はいわゆるエロ本屋です。僕はその三冊の雑誌に告白手記——義父にバイブレーターで犯された私、などというものです——やポルノ小説を書いていきます。ここ一年、ルポルノ出版でしか仕事をしていません。以前は他の幾つかの出版社でも書いていたのですが、フリーライターのほとんどがワープロを使うようになり、手書きの僕は原稿整理が面倒臭いと疎まれだし、残ったのは大木君の所の仕事だけという訳です。仕事を貰っておいでこんなことを言うのはなんなのですが、ルポルノ出版の原稿料はとても安く、月に五万円の養育費を振り込み、家賃を払い酒を飲むと何も残りません。貯金などあるわけがなく、布団に潜り込むと将来に暗鬱たる不安を覚える毎日です。

「遅れて済みません」と僕は大木君の前に腰を降ろし横の椅子に息子を座らせました。

「いや、僕も今来たところですから」、相変わらず胃の悪そうな顔をして大木君が言いました。

「あの、そちらのお子さんは……?」

「息子です。女房と一緒にいるんですが、夏休みなのでうちに遊びに来てるんです」

「はあ」、大木君はわかったようなわからないような妙な顔をしましたが、それ以上は何も尋ねてきませんでした。

僕はメニューを開き、「何にする?」と息子に訊きました。「オレンジジュース」と息子は

答えました。「ケーキも食べていいんだぞ」と言う息子写真は写真付きのメニューを見つめて少し考え、「チョコレートケーキ」と言いました。僕はコーヒーを注文しました。

「さて、僕は太木君の方に向き直りました。「今回はどんな感じでいきましようか？ S M 色をもっと濃くした方がいいかなあ」

太木君はそれに答えず、煙草を灰皿の上で丁寧に揉み消しました。

「あのですね」

「はい」

「急な話で申し訳ないんですが、会社が倒産しちゃったんです。今日」

「は？」

「ですからね、うちの会社が二度目の不渡りを出してつぶれちゃったんです。今日」

「はあ」

「だもんですね、今月、と言いますか、あの、もう、書いて頂く必要がなくなっちゃったんです」

「なるほど」

「僕、他の先生方にも謝りに行かなくちゃいけないんで、これで失礼します」、伝票を持って太木君は立ち上がりました。「あ、先月までのギャラはなんとか振り込めそうなんで」

太木君が店を出ると、オレンジジュースとチョコレートケーキとコーヒーが来ました。僕は

呆然としていました。息子が啞然としたり父親が呆然としたり何やら忙しい日です。大木君はああ言っていました。が、今までの原稿料を貰うのは無理だろうなと思いました。何せ、会社が無くなったのですから。僕は上手にフォークを使ってケーキを食べている息子に言いました。

「あのさ、悪いんだけど、テレビゲームのあれな、もう少し待ってくれないかなあ？」

僕を見上げた息子は一瞬不服そうな顔をしましたが、すぐに「うん。いいよ」と合意してくれ再びケーキを切り崩す作業に没頭しました。

喫茶店を出ると頭上の雲が赤く染まっていました。

「メシでも食いに行くか」僕は息子の手をひき歩きだしました。新宿二丁目に行けばツケのきく店が何軒かあるのです。

ちよつとでも強い風が吹くと今にも崩壊しそうな木造の焼き鳥屋に僕は入りました。小さなカウンターの途中で親父さんがつまらなそうに、おう、と挨拶めいた顔をし、息子を見て、ん？といった顔をしました。「息子です」と僕が言うと、親父さんは全てを了解したという風に二度頷きました。この親父さんは本人曰く、人見知りが激しい、それで、どんなに店がすいていても顔を知らない客は断わる変わった人です。僕はひそかにこの店を、二丁目の京都と呼んでいます。

親父さんは僕の前に焼酎の水割りを、息子の前には瓶のコーラと小皿に山盛りになった枝豆を置きました。